

ソシュールと歴史言語学

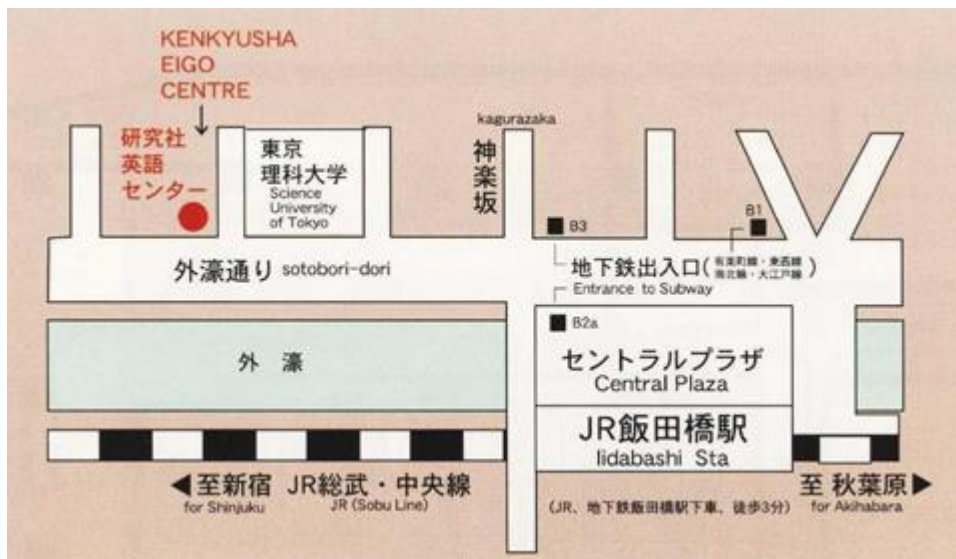
言語の研究にかかわるあらゆる人にとって、フェルディナン・ド・ソシュールの名は特別の響きを帯びています。このたび、日本歴史言語学会が新たに春季公開シンポジウムを開催するにあたり、まずはソシュールを取り上げることにしました。

ソシュールは、歴史的研究一辺倒だった 20 世紀初頭までの言語学を、『一般言語学講義』によって記述的な方向に導いたのだ。ソシュールこそ現代の言語学の祖である。そんな認識を持つ方も多いことでしょう。しかし、『講義』では記述（ないし共時）的な研究ばかりでなく、歴史（ないし通時）的な研究も同様に詳しく取り扱われています。実際、ソシュールは極めて先端的な歴史言語学の専門家だったのです。

実のところ、ソシュールの研究の全貌をつかむことは容易なことではありません。今回のシンポジウムは、ソシュールの業績の真髓と、その後の進展について詳しく知るためのまたとない機会です。歴史言語学の復権が進む今日、現代言語学の祖ソシュールが歴史言語学に残した足跡を正しく把握することは、各方面の研究のために欠くべからざる基礎となることでしょう。どうぞふるってご参加ください。

記

時 2017 年 3 月 19 日（日） 13:00～17:00 参加費 無料
於 研究社英語センター（JR、地下鉄 飯田橋駅より徒歩 3 分）
地下 2 階 大会議室 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 1-2



主催 日本歴史言語学会 共催 株式会社研究社
お問い合わせは日本歴史言語学会事務局 info@jp-histling.com まで

プログラム

13:00 受付開始

13:30 開会のごあいさつ 日本歴史言語学会会長・大阪大学教授 神山孝夫
株式会社研究社社長 関戸雅男

14:00 基調講演 1 ^{クール}『講義』と歴史言語学 名古屋大学教授 町田 健

14:30 休憩

14:45 基調講演 2 ^{アップラウト}母音交替の研究:^{メモワール}『覚え書』と喉音理論 神山孝夫

15:15 基調講演 3 アクセント史の研究 名古屋大学教授 柳沢民雄

15:45 休憩

16:00 座談会「ソシユールと歴史言語学」＋質疑応答
パネル：神山孝夫（司会）、町田 健、柳沢民雄

16:50 閉会のごあいさつ 町田 健

17:00 閉会

講師紹介（五十音順）

^{かみやまた かつお}
神山孝夫 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士（文学）（東北大学）。大阪大学大学院文学研究科教授。専門はヨーロッパ諸語を中心とした歴史言語学と音声学。学位論文でソシユール『覚え書』にはじまる喉音理論と印欧祖語の母音交替を研究。

主要業績：『日欧比較音声学入門』（鳳書房、1995）、マルティネ『「印欧人」のことば誌：比較言語学概説』（ひつじ書房、2003）、国際音声学会編『国際音声記号ガイドブック』（竹林滋氏と共訳）（大修館書店、2003）、『印欧祖語の母音組織：研究史要説と試論』（大学教育出版、2006）、『脱・日本語なまり』（大阪大学出版会、2008）、*Laryngales et schwa indo-germanicum*『待兼山論叢』43（大阪大学、2009）、『ロシア語音声概説』（研究社、2012）、「名誉会員の業績に学ぶ：松本克己著『歴史言語学の方法』、『ことばをめぐる諸問題』』『歴史言語学』5（日本歴史言語学会、2016）。

^{まちだ けん}
町田 健 東京大学大学院人文系科学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院文学研究科教授。専門はロマンス語史を中心に言語学全般。ソシユールの解説本数点に続き、バイイ・セシユエ編『講義』100周年を迎えた2016年、『新訳 一般言語学講義』を研究社から上梓。

主要業績：『言語学が好きになる本』（研究社出版、1999）、『言語が生まれるとき・死ぬとき』（大修館、2001）、『コトバの謎解き：ソシユール入門』（光文社新書、2003）、『ソシユールのすべて』（研究社、2004）、『ソシユールと言語学』（講談社現代新書、2004）、セミル・パディル『イェルムスレウ：ソシユールの最大の後継者』（大修館書店、2007）、『言語世界地図』（新潮新書、2008）、『日本語の正体』（研究社、2008）、『言語構造基礎論』（勁草書房、2011）、『ロマンス語入門』（三省堂、2011）、『フランス語文法総解説』（研究社、2016）、ソシユール『新訳 一般言語学講義』（研究社、2016）。

^{やなぎさわ たみお}
柳沢民雄 名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授。専門は北西カフカース語学、言語類型論、バルト・スラヴ語学。ソシユールにはじまるバルト・スラヴ語の歴史的アクセント研究を日本における草分けかつ第一人者であった故矢野通生教授より受け継ぐ。

主要業績：「古代インド語の動詞のアクセント」『名古屋大学言語学論集』5（1989）、「ロシア語のアクセント法の歴史」『ロシア語ロシア文学研究』25（1993）、「ロシア語アクセント法の史的変遷 1-2」『言語文化論集』15（名古屋大学、1993-4）、『リトアニア語の基礎語彙のデータベース化の研究』（科研成果報告書、1996）、『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』（名古屋大学、2002）、*Analytic dictionary of Abkhaz*（ひつじ書房、2010）、『ヨーロッパのおもしろ言語』（町田健氏他と共著）（白水社、2010）、*A grammar of Abkhaz*（ひつじ書房、2013）、ギャルド『ロシア語文法』（ひつじ書房、2017）。

年表 Ferdinand de Saussure (1857–1913)

略歴と主要業績			関連事情
1857	0 歳	11 月 26 日, 地質学者 Henri と伯爵令嬢 Louise の長男として Genève に誕生.	
1869?	12 歳?	別荘で知遇を得た言語古生物学の創始者 Pictet に刺激を受け印欧語に熱中.	
1873?	15–16 歳	ヘロドトスに見出した τετάχεται (τάσσω, ἵταγ- “put in order” の語根重複と気音を伴う中動・完了 3pl.) の -ατ- が他形 3pl. -vτ- に相当することから, 子音に挟まれ音節核となった v=n が母音 α=a に転じると看破. すなわち Osthoff と Brugman に先立ち「鼻音 ソナント 」(nāsālis sonans) の発想に到達した.	
1874?	16–17 歳	習作 Essai pour réduire les mots du Grec, du Latin & de l’Allemand à un petit nombre de racines にて印欧語の語根構造について試案を作成し Pictet に送る. 同時期, Bopp と Curtius [ˈkortsɪʊs] の著作によってサンスクリットの独習と印欧祖語の 母音交替 についての研究を開始する.	従来 1872 年夏 (14 歳) の作とされた. 長らく散逸していたが 1969 年に遺稿の中に発見され CFS 32 (1978) に掲載.
1875	17–18 歳	秋, Genève 大学入学. 物理, 化学等とともに言語学を学ぶも教員 Wertheimer に不満を覚え, Leipzig への転学を検討. 後に「無駄な一年間」と振り返る.	当地で唯一印欧語学を心得た私講師 Morel が前年 Curtius に受けた講義の内容を紹介.
1876	18–19 歳	早春, Paris 言語学会に論文①を送り入会申請. 5 月 13 日入会が認められる. 秋, Leipzig 大学入学. 主任教授 Curtius と, 後の青年文法学派 Leskien, Osthoff, Paul, Hübschmann, Brugman, Braune, Windisch 等の指導を受ける (～1878 夏). Brugman に「鼻音 ソナント 」第一発見者の荣誉を奪われ不満を募らせる.	Curtius 留守中の紀要に Osthoff の着想に基づき Brugman が「鼻音 ソナント 」説を発表. 若手教員, 特に Osthoff と Hübschmann は Saussure の態度を不遜と受け取る.
1877	19–20 歳	1 月 13 日, Paris 言語学会で口頭発表②. Leipzig より Paris 言語学会に投稿③, ④, ⑤. Curtius の演習で ā と a の交替について報告. 翌日 Brugman より質問あり. 7 月 21 日, Paris 言語学会で口頭発表⑥. 長母音と交替する音韻 A を仮想して ソナント の概念を拡張し, ā と a を含め印欧祖語の 母音交替 全体を解くアイデアを示す. その後, 同発想を推し進め Mémoire の準備を開始.	Curtius は ソナント 説を拒絶. Brugman 等兄弟たちと敵対関係となる. Curtius の麾下を離れた Leskien, Osthoff, Brugman を中心として, 翌年青年文法学派が旗揚げされる (以下, メンバーに㊦と表記).
1878	20–21 歳	Les origines indo-européennes ou les aryans primitifs (Pictet, <i>Essai de paléontologie linguistique</i> 第 2 版の書評). <i>Journal de Genève</i> , 4 月 17, 19, 25 日. Paris 言語学会の機関誌 MSL 3 に短評を含め 6 つの記事が掲載される: ① Le suffixe -t-; ② Sur une classe de verbes latins en -eo; ③ La transformation latine de tt en ss suppose-t-elle un intermédiaire *-stʔ; ④ Exceptions au rhotacisme; ⑤ i, u = es, os; ⑥ Essai d’une distinction des différents a indo-européens . 12 月, Leipzig で Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes を出版. ソナント の概念をさらに拡張して音韻 A, Q を仮想し印欧祖語の 母音交替 を包括的に捉える提案をなす.	㊦Osthoff が Heidelberg 大学教授に就任. ㊦Osthoff と㊦Brugman が MU 誌を創刊して師の Curtius に対抗. 父 Henri が Paris の Havet に Mémoire を贈る. ドイツでは Mémoire は Brugman の ソナント 説の亜流とみなされ正当に評価されず.
1879	21–22 歳	前年暮から Berlin にて Zimmer と Oldenberg に学ぶ. Havet との往復書簡. 父 Henri の意向も勘案し Paris 転学を勧められる. ソナント 説と Mémoire への冷たい反応に接し, 失意のうちに ソナント と印欧祖語の 母音交替 にまつわる研究の続行を断念. ドイツ学界の狭量を憂う. サンスクリットの絶対構文に所格と並んで用いられる属格の用法を扱った手堅い論文 <i>De l’emploi du génitif absolu en sanskrit</i> を新たに用意. 12 月, Leipzig 大学に復学して博士請求. 同時期, 訪問したゲルマン語学者 Zarncke に「かの有名な」 Mémoire の著者の親類と誤解される.	2 月 25 日, <i>Journal de Genève</i> に Havet による Mémoire の高評 (新聞一面全面) が載る. ㊦Brugman は MU2 において Mémoire を「価値ある」としながらも内容には立ち入らず. Fick が Schwa indogermanicum (ə = ソシュールの A) を想定 (Mémoire に言及なし). Möller が Mémoire を正当に評価・修正して E, A, O を想定. 後年 ラリಂಗアル と称する.
1880	22–23 歳	2 月, 最優等 summa cum laude で博士号を受ける (主査 Curtius). リトアニア , Genève を経て, 10 月 Paris で École des Hautes Études 入学.	㊦Paul, <i>Principien der Sprachgeschichte</i> .
1881	23–24 歳	博士論文を Genève で出版. <i>Ἀγαμέμνων</i> . MSL 4. 10 月 31 日, Bopp の弟子 Bréal の推挙により École des Hautes Études のゴート語・古高ドイツ語講師 (maître de conférence) に採用 (～1891). 在任中古ノルド語, 古英語, ギリシア語, ラテン語, リトアニア語等をも講じて Meillet 等を育て, フランスの印欧語学のレベルを飛躍的に引き上げることに貢献. 12 月～翌年 1 月, Paris 滞在中の Baudouin de Courtenay と交流.	㊦Osthoff が長母音と ə の交替を認めるが Mémoire に提案されたソナント拡張の想定を強引に否定. ㊦Leskien が リトアニア語 長母音の短縮化される条件を見出す.
1882	24–25 歳	12 月 16 日, Paris 言語学会副幹事に選出される. MSL の編集にも尽力.	
1883	25–26 歳		㊦Brugman が Brugmann に改綴.
1884	26–27 歳	MSL 5 に 3 編寄稿: Védique <i>libugā</i> – paléoslave <i>lobŭzati</i> ; Südō; Vieux haut-allemand <i>murg, murgi</i> . Une loi rythmique de la langue grecque. <i>Mélanges Graux</i> . Termes de parenté chez les aryas. <i>Les origines du mariage et de la famille</i> .	㊦Brugmann が Freiburg 大学教授に就任.
1885	27–28 歳		㊦Hübschmann の的外れな Mémoire 批判. Curtius 没. 遺作 Zur Kritik der neuesten Sprachforschung で青年文法学派を改めて批判.
1886	28–29 歳		Collitz が ソナント 説と Mémoire を正当に評価し, ㊦Brugmann の狭量を批判して渡米. ㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 初版 I.
1887	29–30 歳	Comparatifs et superlatifs germaniques de la forme <i>inferus, infimus</i> . <i>Mélanges Renier</i> .	㊦Brugmann が Curtius 亡き後の Leipzig 大学教授に就任.
1889	31–32 歳	MSL 6 に 12 編寄稿: Ἀδὴν; Lūdus; Grec <i>ἀλκμών</i> , allemand <i>Schwalbe</i> ; Νυστάζω; Λύθρον; Ἰμβρις; Κρήνη; Βουκόλος; Sanscrit <i>stōkās</i> ; Sur un point de la phonétique des consonnes en indo-européen; Un ancien comparatif de <i>σώφρων</i> ; Gotique <i>wilwan</i> . 健康を害し, 翌年まで休職して Genève 滞在. その間, 書面で Baudouin de Courtenay と Jaunius に リトアニア語アクセント について問い合わせ.	㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 初版 II-1.

日本歴史言語学会
2017 年春季公開シンポジウム「ソシュールと歴史言語学」

略歴と主要業績			関連事情
1890	32-33 歳		㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 初版 II-2.
1891	33-34 歳	6 月 6 日, Paris 言語学会で口頭発表: <i>Contribution à l'histoire des aspirées sourdes</i> . この年, Collège de France 教授に推挙されたが, スイス国籍保持のためこれを固辞して帰郷を決意. Meillet に後を託す. La légion d'honneur 叙勲. 10 月, Genève 大学准教授 (professeur extraordinaire) に就任. サンスクリットとギリシア・ラテン語史, 古ペルシア語, 古英語, リトアニア語等を講ず.	父 Henri の尽力により彼のためにサンスクリットと印欧語のポストが新設された.
1892	34-35 歳	3 月 16 日, 素封家令嬢 Marie Faesch と結婚. Faesch 家より Lausanne 近くの城 Château de Vufflens が贈られる. 長男 Jacques (後に外交官) 誕生. MSL 7 に 18 編寄稿: Les formes du nom de nombre «six» en indo-européen; Φρυκτός; Λιγύς; Vieux prussien <i>siran</i> «le cœur»; Traitement de l'u en vieux prussien; Les féminins en -u du vieux prussien; Gothique <i>þarf, þaúrban</i> «avoir besoin»; Ἀκέων; Τετήμηαι; Ἐπιτηδός; Περί=ὑπερί; Ἡνία; Ὀκρυόεις; Ὑγής; X, Φ pour ks, ps; Attique -ρη- pour -rā-; -υμνο- pour -ομνο-?; Lituanien <i>kūmstė</i> «le poing».	Bechtel が <i>Mémoire</i> を安易に謬見と断定. 同書はドイツで葬り去られる. ㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 初版 II-3.
1893	35-36 歳	夫人と Paris 訪問. このころからめっきり寡作となり, 手紙も滞りがちとなる.	Chantre がヒッタイトの粘土板を発掘. ㊦Delbrück, <i>Grundriß</i> III.
1894	36-37 歳	1 月 4 日, Meillet に書簡を送り, 論文執筆に専心できない気持ちを吐露. 一般的枠組み, 用語を整備する必要性とその作業の困難にも言及. 恐らくこのころ「一般言語学講義」の素案が起稿される. Sur le nominatif pluriel et le génitif singulier de la déclinaison consonantique en lituanien . IF 4. A propos de l'accentuation lituanienne . MSL 8. リトアニア語の二種類の音調の由来を突き止める. 9 月, 第 10 回東洋語学会議 (於 Genève 大学) で事務局長を務める. 同会議にて リトアニア語アクセント について口頭発表. Whitney 追悼文を依頼され, 70 頁余り起稿するが未完のままとなる. 次男 Raymond (後に医師) 誕生.	6 月 7 日, 愛読した <i>The Life and Growth of Language</i> (1875) の著者である合衆国の言語学者 Whitney 没. 11 月 10 日, 第一回アメリカ言語学会議.
1895	37-38 歳		Schmidt が <i>Kritik der Sonantentheorie</i> において ソナント 説を批判.
1896	38-39 歳	サンスクリットと印欧語の正教授に就任. Accentuation lituanienne . IF 6 Anzeiger. 語中の二次的長音節に置かれたアクセントが, 後続する本来的長音節 (母音+ ラリソナル に由来) に規則的に移動することを突き止める (ソシュールの法則).	
1897	39-40 歳	Schmidt, <i>Kritik der Sonantentheorie</i> (書評). IF 7 Anzeiger. サマースクールで「音節理論」を講義. 受講した Bally が自身の講義録を基に出版を勧めるが承知せず.	㊦Delbrück, <i>Grundriß</i> IV. ㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 第 2 版 I-1,2. ついに長母音と ə (=ソシュールの A) の交替を認めるが <i>Mémoire</i> の ソナント 拡張は採らず.
1898	40-41 歳	Inscriptions phrygiennes. <i>Recherches archéologiques dans l'Asie Occidentale. Mission en Cappadoce 1893-1894</i> , par E. Chantre.	
1900	42-43 歳		㊦Delbrück, <i>Grundriß</i> V.
1901	43-44 歳	Le nom de la ville d'Oron à l'époque romaine. <i>Journal de Genève</i> 4 月 7 日版. 数年来俚言調査に従事するも, 11 月 20 日スパイ容疑を受けて断念.	
1903	45-46 歳	Origine de quelques noms de lieux de la région genevoise. <i>Bulletin de la Société d'Histoire et d'Archéologie de Genève</i> , 2. このころゲルマン伝説 (ニーベルンゲン) の詩, トリスタン) に熱中. また, Streitberg の勧めにより回想録を起稿するが未完. 末尾でドイツ人の集団的盲信性に言及.	
1904	46-47 歳	Les Burgondes et la langue burgonde en pays roman. <i>Bulletin de la Société d'Histoire et d'Archéologie de Genève</i> , 3.	㊦Brugmann, <i>Kurze vergleichende Grammatik</i> .
1905	47-48 歳	夫人とイタリア訪問.	父 Henri 没.
1906	48-49 歳	このころアナグラム研究に異常な情熱を燃やすが他者の理解は得られず. 夫人とイタリア訪問. 長年敬遠してきた Wertheimer の退職に伴い, 一般言語学の授業担当となる.	Winckler と Makridi が膨大なヒッタイト粘土板文書を発掘 ㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 第 2 版 II-1.
1907	49-50 歳	第 1 回 一般言語学講義 (1~7 月, 受講者 6 名)	
1908	50-51 歳	7 月 14 日, 50 歳を記念する論文集の贈呈祝賀会に出席. Meillet 他フランスとスイスの教え子, 友人が集まる. 第 2 回 一般言語学講義 (8 年 11 月~9 年 6 月, 受講者 11 名)	<i>Mélanges de linguistique offerts à M. F. de Saussure</i> . Paris: Champion. ドイツからの寄稿はない.
1909	51-52 歳	Sur les composés latins du type <i>agricola</i> . <i>Mélanges Havet</i> . 夫人と Paris 訪問.	㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 第 2 版 II-2-1.
1910	52-53 歳	第 3 回 一般言語学講義 (10 年 10 月~11 年 7 月受講者 12 名)	
1911	53-54 歳	夫人と Paris 訪問.	㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 第 2 版 II-2-2.
1912	54-55 歳	Adjectifs indo-européens du type caecus 'aveugle' . <i>Festschrift Vilhelm Thomsen</i> . 喉頭癌 (?) の病状が悪化. 夏から授業を休み, Vufflens 城にて Marie 夫人の看病を受けつつ闘病. 病床では中国語研究に勤しむ.	Meillet の弟子 Cuny が <i>Mémoire</i> と Möller を見出し, E, A, O を 𐎧, 𐎡, 𐎢 と表記
1913	55 歳	2 月 22 日, Vufflens 城にて死去. 直接の死因は心臓発作. 2 月 26 日, 葬儀. 最後に École Pratique des Hautes Études から「天才的言語学者」の名を捧げる Havet からの弔電が紹介される.	㊦Brugmann, <i>Grundriß</i> 第 2 版 III-1.

没後の Saussure（歴史言語学関係・抄）

1913	2 月 28 日, Séchehay が追悼講演. 10 月 27 日, Bally が追悼講演. 師の教えを書籍化する計画を発表. Meillet の追悼文 (BSL 18).
1915	夫人 Marie de Saussure 編の追悼文集. Leipzig 大学の後輩 Streitberg による追悼記事 (<i>Indogermanisches Jahrbuch</i> 2). その後 Brugmann が Streitberg に同記事についての感想を書き送る. 彼が <i>dieser gescheite Gelehrte</i> 「この優れた学者」と呼ぶ Saussure が Leipzig に多くを負っているが, <i>Mémoire</i> 冒頭に謝辞を添えるなど, 相応の礼儀を欠いたことが反感を買ったと指摘.
1916	主に第 3 回講義を基に, Genève での弟子 Bally と Séchehay が編んだ <i>Cours de linguistique générale</i> が刊行される.
1917	Hrozný がヒッタイト文書解読に成功.
1922	Bally, Gautier 編 (Meillet 協力) 著作集 <i>Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure</i> . Paris: Payot.
1927	Meillet の弟子 Kurylowicz が <i>a</i> indoeuropéen et <i>h</i> hittite においてラリンガルがヒッタイト語の <i>h</i> に相当すると発表.
1928	小林英夫訳『一般言語学原論』岡書院.
1931	Sapir の忠言を受けた Sturtevant が翻意してラリンガル説を採用.
1935	Kurylowicz, <i>Études indoeuropéennes</i> I. Kraków: Polska Akademia Umiejętności. Benveniste, <i>Origines de la formation des noms en indo-européen</i> I. Paris: Adrien-Maisonneuve.
1937	Couveneur, <i>De Hettitische h : Een Bijdrage tot de Studie van het Indo-Europeesche Vocalisme</i> . Leuven.
1938	Möller の弟子 Pedersen がラリンガル説を採り H ₁ , H ₂ と表記 (ただし H ₃ は認めず). 以降 H ₁ H ₂ H ₃ の表記が半ば一般化する.
1939	高津春繁「印欧語母音變化の研究と Laryngales の發見」『言語研究』3.
1940	小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店
1941	Saussure 研究誌 <i>CFS</i> 創刊.
1942	Kuiper が音声実現も勘案して h ₁ , h ₂ , h ₃ の表記を提案. 以降, これを簡略化した h ₁ h ₂ h ₃ も徐々に用いられるようになる.
1957	第 8 回国際言語学学会議 (於 Oslo) でラリンガル説が主要議題のひとつとなる. Godel, <i>Les sources manuscrites du Cours de linguistique générale de F. de Saussure</i> . Genève: Droz.
1959	国際会議 Evidence for Laryngeals (於 Austin, Texas) が招集される (1960, 1965 書籍化).
1963	風間喜代三「PIE. e, a, o の仮定について」『名古屋大学文学部研究論集』31.
1964	風間喜代三「最近の印欧語の <i>ə</i> の解釈について」『言語研究』45. Benveniste, F. de Saussure à l'École des Hautes Études. <i>École pratique des hautes études. 4e section, Sciences historiques et philologiques</i> .
1967	Mauro, <i>Introduzione, traduzione e commento del Corso di linguistica generale di Ferdinand de Saussure</i> . Bari: Laterza.
1968	Engler, <i>Ferdinand de Saussure. Cours de linguistique générale. Édition critique</i> . Wiesbaden: Harrassowitz.
1972	小林英夫訳『一般言語学講義』(第 2 版) 岩波書店.
1976	マウロ著, 山内貴美夫訳『「ソシュール 一般言語学講義」校注』而立書房.
1978	散逸していたソシュール 16 歳時 (1874?) の習作が Havet の <i>Mémoire</i> 評 (1879) とともに <i>CFS</i> 32 に掲載される. 月刊『言語』3 月号 (大修館書店) で特集「ソシュール: 現代言語学の原点」. 風間喜代三『言語学の誕生』岩波新書.
1980	『現代思想』10 月号 (青土社) で特集「ソシュール」
1984	矢野通生「リトアニア語アクセント論覚え書き」『言語研究』87.
1985	丸山圭三郎編『ソシュール小事典』大修館書店.
1990	Paolla Villani, Documenti Saussuriani conservati a Lipsia e a Berlino. <i>CFS</i> 44. Brugmann, Saussure, Streitberg 間の書簡などが掲載.
1991	前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局.
1999	Boston, MA のポップグループ The Magnetic Fields が The Death Of Ferdinand De Saussure なる曲を発表. 関連不明.
2002	1996 年に Saussure 邸で発見された未刊草稿が刊行される: <i>Écrits de linguistique générale</i> . Paris: Gallimard.
2003	相原奈津江, 秋津伶訳『一般言語学第三回講義: エミール・コンスタンタンによる講義記録 1910-1911 年』エディット・パルク.
2004	町田 健『ソシュールのすべて』研究社.
2006	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第二回講義: リードランジェ/パトワによる講義記録 1908-1909 年』エディット・パルク. 神山孝夫『印欧祖語の母音組織』大学教育出版.
2007	影浦峽・田中久美子訳『第三回一般言語学講義: エミールコンスタンタンのノート』東京大学出版会.
2008	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第一回講義: リードランジェによる講義記録 1907 年』エディット・パルク.
2009	小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第三回講義: コンスタンタンによる講義記録+ソシュールの自筆講義メモ』エディット・パルク. Rousseau, Saussure à Paris (1880-1891). <i>Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres</i> .
2013	松澤和宏校註・訳『ソシュール一般言語学著作集 I 自筆草稿「言語の科学」』岩波書店. 菅田茂昭訳『ソシュール 一般言語学講義抄』大学書林.
2016	<i>Cours de linguistique générale</i> 100 周年. 町田 健訳『新訳 一般言語学講義』研究社.

BSL: *Bulletin de la société de linguistique de Paris* (『パリ言語学会紀要』新版)
CFS: *Cahiers Ferdinand de Saussure* (『ソシュール・ノート』誌)
Grundriß: *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen* (『印欧語比較文法概説』)
IF: *Indogermanische Forschungen* (『印欧語研究』誌)
MSL: *Mémoire de la société de linguistique de Paris* (『パリ言語学会紀要』旧版)
MU: *Morphologische Untersuchungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* (『印欧語における形態論研究』誌)

日本歴史言語学会
2017年春季シンポジウム
ソーシャルと歴史言語学
基調講演1

『講義』と歴史言語学

名古屋大学教授
町田 健

言語に関わるアポリア

言語の最も重要な機能:

話し手が頭の中で作り上げた事態と同一の
事態が聞き手によって理解される。

この機能を充たすための理想的状態:

言語共同体に属するすべての言語使用者が
同一の言語を所有する。

→言語は変化しない。

しかし、任意の言語が変化する。

ソーシャルの取り組み

言語に関わるアポリアを解決する。

言語は変化するべきではないのに、どうして
変化するのか。

このためには、人間の言語の本質を解明しな
ければならない。

言語変化を妨げる要因

1. 記号の恣意性

恣意性は言語変化を可能にする要因ではあるが、合理的な規
範に基づいていることはないから、大衆が変化を議論すること
はない。

2. 記号の多数性

記号の個数は無限だから、他の体系には置き換えられない。

3. 体系の複雑性

体系は複雑だから、大衆はその機構を理解できない。

4. 言語的改変に対する集団の無気力

記号は恣意的だから、伝統以外の法則には従わない。

言語変化を促す要因

時間はあらゆるものを変化させるのであり、ラ
ングがこの普遍的な法則を逃れる理由はない。

ラングの継続性から必然的に変化＝シニフィア
ンとシニフィエの間のずれが帰結する。

音変化の原因

従来の説はいずれも正しくない。

1. 民族には音変化の方向を前もって描いておく性
向がある。
2. 地質や気候の条件に適応するために音が変化
する。
3. 最小努力の法則が作用する。
4. 幼児期における発音の習得が不完全。
5. ある時点での国家の状態が作用する。
6. 言語基層が作用する。
7. 音は流行と同様に、変化しようになっている。

類推と進化

パロールで試されることなしには、どんなものでもラングに取り入れられることはなく、進化に関わる現象はすべて、個人の領域の中にその起源がある。

- ・ 幼児のフランス語 venir の代わりに viendre

éteindrai : éteindre = viendrai : x

x = viendre

民間語源

- ・ 中世ドイツ語 äbentüre < フランス語 aventure 後に Abenteuer と綴られる。

Abend < 晩 > と関連させた結果 Abendteuer という表記が一時用いられた。

- ・ ドイツ語 Sauerkraut

フランス語では choucroute

フランス人が sauer < 酸っぱい > から chou < キャベツ > を、Kraut < 野菜の葉 > から croûte < 外皮 > を連想した結果、この語形が出来た。

連続した領域における時間の作用

- ・ ランガージュに関しては、絶対的な不変性は存在しないから、一定の時間が経過すると、言語は変化する。
- ・ 領域の全体で、進化が一様であることはなく、場所によって変異がある。

多様性が作り出される際の特徴

- ・ 進化は、連続的で明確な改変という形を取り、その性質によって分類できるのと同じだけの部分的な事実(語彙、形態、統語)を構成する。
- ・ 改変は、一定の地表面で、明確な範囲において達成される。
- ・ a. 改変の範囲が領域全体にわたり、方言的な違いが生じない。
- ・ b. 変化が領域の一部にしか及ばず、方言的な違いが生じる。

交流(インターコース)と郷土愛

交流: 言語の拡大と凝集の原因

否定的な作用: 改変を封じ込める

肯定的な作用: 改変を受け入れて広める

郷土愛: 方言の個別化を推進する

言語(ラング)はなぜ変化するのか

- ・ 語彙(語、形態素)は体系をなす。
- ・ 体系を構成する要素の価値は、相互の関係によって決定される。
- ・ 語・形態素の意味は、それが表示する事物の集合の特性である。
- ・ 人間の社会は必ず変化し、これに応じて、社会が形成する状況を構成する事物の集合も変化する。
- ・ 事物の集合が変化すれば、これと関係する他の事物の集合の特性が変化する。
- ・ したがって、事物の集合の特性としての意味も変化する。
- ・ 語・形態素の意味が変化するということは、これらの記号の価値が変化するに他ならない。

音素体系の変化

- 音素は音声(異音)の集合である。
- 音声はパロールにおいて、絶えざる変化にさらされている。
- 音素の要素である音声に変化が生じれば、音素の特性はこれに応じて変化する。
- 何らかの音素の特性が変化すれば、音素の体系にも必然的に変化が生じる。

構造規則の変化

- 構造規則(形態素配列規則)の基本は、事物の意味役割を表示する手段によって決定される。
- 意味役割を表示する方法:
 - a. 特別の形態素を用いる。
 - b. 名詞が語形変化する。
 - c. 語順を用いる。
- b. の場合、音声変化が語形変化に直接的な影響をもたらす。
語形変化が単純化するか失われれば、c. の類型へと移行する→構造規則の変化

日本歴史言語学会
2017年春季シンポジウム
ソシールと歴史言語学
基調講演2

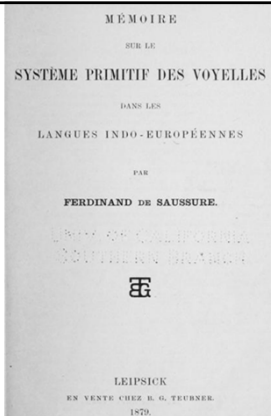
母音交替の研究 —『覚え書』と喉音理論—

大阪大学文学研究科
神 山 孝 夫

Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes

『印欧語における初源的母音組織に関する覚え書』

扉の記載は1879年
実際には1878年12月刊
ソシール21歳



『覚え書』の位置

下記3点において極めて重要な研究

1. 印欧祖語(PIE)の母音組織
2. 母音交替(Ablaut)のしくみ
3. 後のラリナル(喉音)理論

その理解・評価には、詳しい研究史とともに、ソシールの性格、人間関係の把握が不可欠

PIE 母音組織の模索

母音の基本的な対応

Eur.	i	e	a	o	u	ī	ē	ā	ō	ū
Skt.	i	a	a	a	u	ī	ā	ā	ā	ū
PIE	i	?	a	?	u	ī	?	ā	?	ū

問題は？部分

本来の母音はいずれに保たれているのか？

Grimm の判断

Rask の著作によって Grimm は音論に目覚め、『ドイツ文法』第1巻第2版(1822: 594)で独断！

Eur.	i	e	a	o	u	ī	ē	ā	ō	ū
Skt.	i	a	a	a	u	ī	ā	ā	ā	ū
PIE	i	a	a	a	u	ī	ā	ā	ā	ū

祖語の a がヨーロッパで e a o に分かれた??
サンスクリットを重んじた個人的見解

Grimm の権威化

その後、Grimm の説(PIE *a > Eur. e, a, o)が半世紀以上にわたって権威として君臨してしまう

Bopp (1820: 7) と Benfey (1837: 911) は PIE *e, *o > Skt. a を疑ったが、当時はほとんど知られず:

Bopp, Franz 1820 Analytical Comparison of the Sanskrit, Greek, Latin, and Teutonic Languages, shewing the Original Identity of their Grammatical Structure. *Annals of Oriental Literature*, 1.

Benfey, Theodor 1837 Review of A. F. Pott, *Etymologische Forschungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* (1833-36). *Ergänzungsblätter zur Halleschen allgemeinen Literatur-Zeitung*, December 1837.

Grimm の権威への挑戦

幾多の試みが行われるがいずれも失敗
e.g. Schleicher, Curtius ['kortsios], Scherer

1876年からライプツィヒにおいて急に進展。
若手教員 Osthoff, Brugman, そしてソシュールが
先を争うようにして大きな進展を達成 (実質的 rivals)

結果的に Grimm の想定 (PIE *a > Eur. e, a, o) は
反対の想定 (PIE *e, *a, *o > Skt. a) に駆逐された

想定 I 印欧祖語にもともとあった母音は
 $a_1 = e$ と $a_2 = o$ である

想定 II 基本的な母音は e であり,
e は一定条件において o に交替する

Brugman, Karl 1876a Zur Geschichte der stamm-
abstufenden Declinationen. Erste Abhandlung : Die
Nomina auf -ar- und -tar-. *Studien zur griechischen
und lateinischen Grammatik* 9. (先鞭)

Saussure, F. de 1878 Essai d'une distinction des
différents a indo-européens. *MSL* 3.
(77年7月, パリ言語学会で発表 (19歳))

想定 III 印欧祖語の母音は
一定の条件においてゼロと交替する

Osthoff, Hermann 1876 Zur frage des ursprungs
der germanischen N-declination (nebst einer
theorie über die ursprüngliche unterscheidung
starker und schwacher casus im
indogermanischen). *PBB* 3. (先鞭)

Brugman, K. 1876b Nasalis sonans in der
indogermanischen Grundsprache. *Studien zur
griechischen und lateinischen Grammatik* 9.

想定 IV 印欧祖語の音節核は「母音」
あるいは「母音+ソナント」から成る

Brugman (1876b) (先鞭), Saussure (1879)

想定 V 音節核の母音がゼロに交替すると,
隣接するソナントは単独で音節核となる
(Saussure,) Osthoff (1876) (先鞭), Brugman (1876b)

想定 VI 機能的に見て, i と u は本来的な母音
ではなく, 流音や鼻音と同じくソナントの
一種である

Saussure (1879)

ソシュールの用語は « coefficient sonantique »

I ~ VI から導かれる PIE の母音交替

母音のみ $e : o : \text{ゼロ}$

母音+半母音 $ei : oi : i$ $eu : ou : u$

母音+流音 $er : or : r$ ($el : ol : l$)

母音+鼻音 $en : on : \eta$ $em : om : \eta$

以上のうち r は受け入れられたが, η と η (いわゆる
nasalis sonans) は Curtius 等旧世代に拒絶される

1878年, Osthoff, Brugman 等を中心に青年文法学派が
結成され, 新旧世代の非生産的な論争が勃発

残された難問: 長母音

ここまではライバル3人の共同成果にも見える

さらにソシュールはただ一人
長母音と Eur. a / Skt. i の交替に挑む

e.g. Lat. stā-re sta-tus "stand"

Skt. sthā- sthi-ta-

1877年, Curtius の演習で解決法の試案を発表
(翌日 Brugman が彼に質問. 理解に至らず)

同年7月パリで発表 (翌年活字化)

長母音をめぐるソシユールの推理

想定Ⅶ 鼻音, 流音, i, u 以外にも
未知のソナントが存在する

Saussure (1878, 1879)

想定Ⅷ 母音とこれらのソナントとの結合から
長母音が生じる.

Saussure (1878, 1879)

想定Ⅸ 単独で音節核となった場合, これらの
ソナントは ə (Eur. a, Skt. i) となる.

Saussure (1878)

未知の音韻 A を仮想 (1878)

e.g. Lat. stā-re sta-tus "stand"

Skt. sthā- sthi-ta-

coefficient sonantique A を仮想

他の母音交替 (e と ゼロ) と同様の処理を提案:

PIE *steA- *stA-

*eA > ā *A > ə (Eur. a / Skt. i)

翌年, Fick は, ソシユールに触れずに, 単独の母音となる A
を schwa indogermanicum と呼ぶ (後に表記 ə が一般化)

Fick, August 1879 Schwa indogermanicum. BB 3

さらに q を仮想 (1879)

さらに, ソシユール (1879) は
もう一つの coefficient sonantique q を仮想し,
前作で不充分であった o 階梯の扱いを補正

結果的に, 長母音と ə の交替を

e : o : ゼロ の母音交替の中に位置づけた
(次葉に例示)

長母音1

長母音2

ə

Lat. stā-re prae-stō-lor sta-tus

Gk. ῥ-στᾱ-μι στῶ-μιξ στα-τός

Skt. á-sthā-m sthā-na- sthi-tá-

PIE *steA- > *stā- *stoA- > *stō- *stA- > *stə-

Lat. (dō) dō-num da-tus

Gk. δι-δω-μι δῶ-πον δο-τός

Skt. dá-dā-mi dā-na- (di-tá-)

PIE *deq- > *dō- *doq- > *dō- *dq- > *də-

e : o : ゼロ

画期的な発想法

しかし, 母音交替研究を断念

- ソナント理論の priority についての自負
- ソナント理論に対する旧世代の無理解
- ソナント理論への貢献と, その拡張に対する新世代 (青年文法学派) の無理解と無視
- ソシユールに言及せずに成果盗用 (Fick 等)



母音交替研究を断念, 別件で学位取得
Havet の勧誘に応じてパリ移住を決意

その後のソシユール理論

- Möller による補正 (1879, 1880, etc.)
- 彼の命名により Laryngale (laryngeals) の呼称が一般化 (以下では「ラリンガル」)
- Cuny の追認 (1909, 1910, 1912)
- Kurylowicz (1927) が Hitt. ḫ との対応を発表
- 次々と追認: Sapir, Sturtevant (1931, 1942), Benveniste (1935), Couvreur (1935, 1937), Pedersen (1938), etc.
- 長らくソシユールを黙殺してきたドイツの学界を含め印欧語界全体に採用されるに至る

Möller による補正(1879) 1

ソシュールの **A** **Q** に **E** を付加

長母音1	長母音2	ə
Lat. fē-cī	ab-dō-men	fa-ciō
Gk. ῑ-θη-κα	θω-μός	θε-τός
Skt. á-dhā-m	dhā-tar	hi-tá-
PIE *dhe E - > *dhē-	*dho E - > *dhō-	*dh E - > *dhə-

e : o : **ゼロ**ソシュールは **A** の変種とみなしていた

Möller による補正(1879) 2

E **A** **Q** に母音が後続する場合を考慮

* Ee > *e ῑδω	* EO > *o όδύνη	* E > ə όδους
* Ae > *a ἄγω	* AO > *o ὄγμος	* A > ə άκτός
* Qe > *o ὄψομαι	* Qo > *o ὄψις	* Q > ə όπτός

ソシュールはこれらの現象に気づかなかった

ラリンガル表記の変遷

Saussure	A		Q
	small cap ↑ ↓ capital		
Möller	E	A	O
Cuny	ə ₁	ə ₂	ə ₃
Pedersen	H ₁	H ₂	—
Kuiper	h ₁	h ₂	h ₃
現用1	H ₁	H ₂	H ₃
現用2	h ₁	h ₂	h ₃

ラリンガル音価の推定

- Möller: 子音と推定 (子音説)
- Cuny: 母音/子音 (ソナント説)
- Saussure: 当初ソナント説(1878, 1879)
後に子音性に言及(1891)
- 未解決のまま
- 子音説を採りながらも、母音化を許容する
折衷的な珍説が横行する

音声学的にありえない想定

ラリンガルの子音性

- Hitt. ḫ ([x]?) との対応:
*H₂enti > Hitt. ḫanti
vs. Lat. ante
- 気音化: *stH₂-to- > Skt. sthitá-
vs. Gk. στατός
- 有声化: *pi-pH₃-eti > Skt. pibati
Lat. bibit
- 硬化: *de-deH₃-H₂e > Gk. δέδωκα
*d^heH₁-H₂e-i > Lat. fēcī

ソナント説は誤りと言わざるを得ない

では *ə はどこから?

- 純粋な子音たるラリンガルとは別個の音韻
- 早期の印欧祖語の発達の中で生じた挿入母音
(anaptyxis)ともみなしうる
- Kurylowicz (1935): *ə < *ə_e (e: schwa secundum)
- Sturtevant (1942): *ə < *ə_H (b: schwa secundum)
- Burrow (1949, 1955, 1979): *ə 自体を否定
- その場合, *CeH_x ないし *H_xeC から e が完全に
脱落し, その後新たに母音 *ə が挿入されたと
みなすことが必要となる (恐らく考えにくい)

*e の弱化による試案

- ① 無アクセント音節において *e は *[ə] に弱化した
- ② ソナントに隣接する場合, *e は完全に弱化して脱落. 隣接するソナントが音節主音となる:
e.g. *mer-tó- > *m[ə]r-tó- > *mṛtá- (Skr. mṛtá-)
- ③ 噪音に挟まれる場合, *e > *[ə] > *o:
e.g. *ped-és > *p[ə]dés > podés (Gk. ποδές)
後に音声環境に関係なく *o は名詞, 完了等に一般化
- ④ ラリンガルに隣接する場合, *e > *[ə] > *ə:
e.g. *deH₃-tó- > *d[ə]H₃-tó- > *dətó- (Lat. datus)



『覚え書』140年

- Möller 以来補正を受けつつも, ソシュールが『覚え書』で提示した想定全体は支持を失っていない(彼の名が出ないこともしばしば)
- しかし, 幾多の問題が未解決のまま
- 『覚え書』出版からほぼ 140 年を経たが, 乗り越えるべき極めて重要な先行業績として, 同書は今日も生きている

Abbreviations

BB	(Bezzenbergers) Beiträge zur Kunde der indogermanischen Sprachen
BSL	Bulletin de la société de linguistique de Paris
Eur.	European
Gk.	Greek
Hitt.	Hittite
KZ	(Kuhns) Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung
Lat.	Latin
MSL	Mémoire de la société de linguistique de Paris
PBB	(Paul und Braune) Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur
PIE	Proto-Indo-European
Skt.	Sanskrit

Selected bibliography 1

- Benfey, Theodor 1837 Rezension: A. F. Pott, *Etymologische Forschungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* (1833-36). *Ergänzungsblätter zur Halleischen allgemeinen Literatur-Zeitung*, Dezember 1837.
- Benveniste, Émile 1935 *Origines de la formation des noms en indo-européen*. I. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- Bopp, Franz 1820 Analytical Comparison of the Sanskrit, Greek, Latin, and Teutonic Languages, shewing the Original identity of their Grammatical Structure. *Annals of Oriental Literature* 1.
- Brugman, Karl 1876a Zur Geschichte der stammbastufenden Declinationen. Erste Abhandlung: Die Nomina auf -ar- und -tar-. *Studien zur griechischen und lateinischen Grammatik* 9.
- 1876b Nasalis sonans in der indogermanischen Grundsprache. *Studien zur griechischen und lateinischen Grammatik* 9.
- Burrow, Thomas 1950 "Shwa" in Sanskrit. *Transactions of the Philological Society*, 1949.
- 1955 *The Sanskrit Language*. London: Faber & Faber.
- 1979 *The Problem of Shwa in Sanskrit*. Oxford: Clarendon Press.
- Cuvier, Walter 1935 *Die hettische Sprache*. *Teksten en verhandelungen* Nr. 12. Philologische Studien. Leuven (Louvain): Katholieke Universiteit te Leuven.
- 1937 *De Hettische Sprache: Een Bijdrage tot de Studie van het Indo-Europesche Vocalisme*. Bibliothèque du Musée 5. Leuven (Louvain).
- 1943 *Le h hittite et les phonèmes laryngaux en indo-européen*. *L'antiquité classique* 12.
- Cuny, Albert Louis Marie 1909 *Compte rendu: Möller 1906; 1909a. Revue des études anciennes: Annales de la Faculté des lettres de Bordeaux et des universités du Midi* 11.
- 1910 *Compte rendu: Möller 1909b. Revue des études anciennes: Annales de la Faculté des lettres de Bordeaux et des universités du Midi* 12.
- 1912 *Notes de phonétique historique: indo-européen et sémitique. Revue de phonétique* 2.
- Fick, August 1879 *Schwa indogermanicum*. BB 3.
- Grimm, Jacob 1819, 1822* *Deutsche Grammatik* I. Göttingen: Dieterichsche Buchhandlung.
- 神山孝夫 2003 『印欧祖語のアップラットと文法構造の発達』『大阪外国語大学論集』27.
- 2006 『印欧祖語の母音組織: 研究史要説と批判』大学教育出版
- 2009 *Laryngals et schwa indogermanicum* 『待来山論叢』43 (文化動態論叢).
- 風間喜代三 1963 『PIE. e, a, o の仮定について』『名古屋大学文学部研究論集』31 (文学11).
- 1964 『最近の印欧祖語の a の解釈について』『言語研究』45.
- 1978a 『言語学の誕生』岩波新書.
- 1978b 『ソシュール『覚え書』(メモワール)の位置』『言語』7 (3).
- 高津孝繁 1939 『印欧祖語母音変化の研究と Laryngals の発見』『言語研究』3.
- 1954 『印欧祖語比較文法』岩波全書.

Selected bibliography 2

- Kurylowicz, Jerzy 1927 *a* indoeuropéen et *h* hittite. *Symbolae grammaticae in honorem Ioannis Rozwadowski*, I. Kraków: Gebethner & Wolff.
- 1935 *Études indo-européennes*. I. Kraków: Polska Akademia Umiejętności.
- 1956 *L'apophonie en indo-européen*. Wrocław: Zakład Imienia Ossolińskich; Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.
- Martinet, André 1953 Non-Apophonic o-Vocalism in Indo-European. *Word* 9.
- 1955 *Le couple senex-senatus et le «suffixe» -k-*. BSL 51.
- 1957 Some Cases of -k- / -w- Alternations in Indo-European. *Word* 12.
- 1957 Phonologie et «laryngales». *Phonetica* 1.
- 1958 *Les «laryngales» indo-européennes*. In Sivertsen, Eva (ed.) 1958 *Actes du huitième Congrès International de Linguistes = Proceedings of the Eighth International Congress of Linguists*. Oslo University Press.
- 1986, 1994* *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «indo-européens»*. — Paris: Payot (神山孝夫訳).
- 2003 『印欧人のことば誌: 比較言語学概説』ひつじ書房.
- Möller (= Möller), Hermann 1879 Anzeige: Friedrich Kluge, *Beiträge zur Geschichte der germanischen conjugation* (Straßburg: Trübner, 1879). *Englische Studien* 3. Heilbronn: Verlag von Gebr. Henninger.
- 1880 Zur declination: germanisch *ā ē ö* in den endungen des nomens und die entstehung des o (*a*). PBB 7.
- 1906 *Semitisch und indogermanisch*. I. København: Hagerup.
- 1909a Die gemein-indogermanisch-semitischen Worttypen der zwei- und dreikonsonantigen Wurzel und die indogermanisch-semitischen vokalischen Entsprechungen. KZ 42.
- 1909b *Indoeuropäisch-semitisch sammenlignende Glossarium* (Festschrift udgivet af Kjöbenhavns Universitet i anledning af Universitets Aarsfest). København: Hagerup.
- Osthoff, Hermann 1876 Zur frage des ursprungs der germanischen N-declination (nebst einer theorie über die ursprüngliche unterscheidung starker und schwacher casus im indogermanischen). PBB 3.
- Pedersen, Holger 1938 *Hittitisch und die anderen indoeuropäischen Sprachen*. København: Levin & Munksgaard.
- Saussure, F. de 1878 *Essai d'une distinction des différents a indo-européens*. MSL 3.
- 1879 *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*. Leipzig: Teubner; Paris: Vieweg.
- 1891 Contribution à l'histoire des aspirées sourdes (Communication orale à la Société de Linguistique de Paris (séance du 6 juin 1891)).
- Schleicher, August 1861 *Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*. I. Weimar: Hermann Böhlau.
- Sturtevant, Edgar Howard 1931 Changes of Quality Caused by Indo-Hittite h. *Language* 7 (2).
- 1942 *The indo-Hittite Laryngals*. Baltimore: Waverly Press.

日本歴史言語学会
2017年春季シンポジウム
ソシュールと歴史言語学
基調講演3

アクセントの研究

ーソシュールのリトアニア語アクセント研究ー

名古屋大学教授

柳 沢 民 雄

目次

1. ソシュール(S)とリトアニア語アクセント(Lith. Acc.)研究
 - ・何故、SはLith. Acc.研究をしたのか？
 - ・Sの中でのLith. Acc.研究が占める位置は？
2. SのLith. Acc.の2つの論文について
 - 第1論文・「リトアニア語アクセント法について」1894
A propos de l'accentuation lituanienne, MSL.
 - 第2論文・「リトアニア語のアクセント法」1896
Accentuation lituanienne, IF.
3. その後のSのLith. Acc.研究の評価
 - ・「ソシュールの法則」
 - ・「音調とアクセントの独立」説
 - ・Lith. Acc.と印欧語のアクセントとの関係
 - ・Lith.の移動アクセントの起源

2

1. ソシュールとリトアニア語アクセント研究

・何故、SはLith. Acc.研究をしたのか？

Joseph (2009):「Sは、リトアニア語のピッチアクセントの特徴は印欧語言語史のmissing linkであり、*Mémoire* (1879)で仮定された母音 *A の最も直接的な生き残り残滓であると信じていた。リトアニア語アクセント法は、彼の初期の研究の中心となる仮説が実は真実であるという独自の証拠を提供したのである。」

・Sの中でのLith. Acc.研究が占める位置

Sはレスキーンによりリトアニア語を学んで以来、リトアニア語に関心を持ち続けていた。1880年にはリトアニアにてフィールド調査を行う。バリ時代の1888-1889年にリトアニア語の授業を行う。1889年にリトアニア語の音調体系についてのペーパーをバリ言語学会で発表(1894年に論文として出版:Sの第1論文)。

3

ジュネーブ時代(1891年以後):

ジュネーブ図書館の新しい文書(1996年にジュネーブの公立図書館に入った文書)によれば、1888年から1896年の間、Sはリトアニア語アクセント法についての本を書く計画であった。[Petit 2010]

リトアニア語アクセント法についての文書のほとんどは、1893-1894年に書かれた。1896年にはその計画は完全に放棄される。この本のための文書の断片は、およそ500頁になるが、Sの古文書館に保存されている。「その本の構造と主要なアイデアは、間違いなく再構築できる」[Petit 2010]

1896年にSの第2論文の出版。

1901-1902年の間:

ジュネーブ大学でリトアニア語の授業。ジュネーブの公立図書館には、Charles Ballyの手になるこの授業のノートブックが保管されている(このノートはSのリトアニア語に関する最終的な思想が書かれている)。「1894年と1896年の論文は、氷山の一部分の断片にすぎない。」

「リトアニア語はSにとって彼の思想のアイデアを発展させた実験室であった、と言えるかもしれない。」 Petit (2010: 143-166)

4

2. SのLith. Acc.の2つの論文について

第1論文・「リトアニア語アクセント法について」

A propos de l'accentuation lituanienne, MSL. 1894. [Recueil, 1922:490-512]

[内容]・リトアニア語の音調(intonation (tone))とアクセント(accent (stress))の問題を扱う。特に、他の印欧語(Skt., Gk., Lat., Got.)の長母音(長いソナント)とリトアニア語の鋭い音調(intonation rude (acute t.))との対応を扱う。

現代(標準)リトアニア語の音調とアクセント:

上昇音調 circumflex t.: ~ vỹnas 《ワイン》

下降音調 acute t.: ´ vỹras 《男》

短アクセント grave: ` rankà 《腕》

5

Sの「音調とアクセントとの関係」の理解:

レスキーンの法則 (1881)を認めるだけでなく、全ての種類の長母音において(アクセント音節においても無アクセント音節においても)音調は特徴的であった。

「音調は、リトアニア語においてその音調アクセントを随伴する現象では決してなくて、長さを随伴する現象である。音調は、リトアニア語の音節のプロソディの切り離すことのできない部分であり、アクセントとは不可欠なものとして結びつかない。(中略)実際、無アクセント音節において音調は我々にとって隠されたままである。音調はそれに強さを付加するアクセントのおかげだけによってのみ、直接に感じられるようになるのである。」[Recueil, 491]

6

I. 「stótiの法則」

(原初から存在する、原初的に長い単母音 -[ā]-, -[ō]-, -[ē]-, -[ī]-, -[ū]- は、リトニア語では、もしその音調が何らかの特別な状況の理由で変化しなければ、常にアキュート音調であろう。)[Recueil, 491]

例:

[ā]	Skt. sthā- "stand, stay"	Lith. stóti
	Skt. mātā "mother"	Lith. mótė
[ō]	Skt. dhānās	Lith. dúona "bread"
[ī]	Skt. vīras "man, husband"	Lith. vỹras
[ū]	Skt. sūnús "son"	Lith. sūnų (acc.)
[ē]	Skt. vāyus "wind"	Lith. vėjas

例外は、メタトニー *métatonie* 等として説明。

7

II. ē, ī, ū, ē の反映

F. F. Fortunatov (1879 [1880]) によって発見された、流音をもつリトニア語の二重母音的結合と音節流音の古代インド語等の反映との対応関係:

- I. Lith. -iř-, -iļ- (*vilkas*) : Olnd. -r- (*vṛkas*) "wolf"
 II. Lith. -ir-, -il- (*ilgas*) : Olnd. -ir-, -ūr- (*dīrghá-*) "long"

Sの考え:

Lith. ir (acute)	<	PIE *ř < *r + ō
Lith. iř (circumflex)	<	PIE *ř

「ř は r + ō と同じであり、従って、ちょうど ā が ä と異なっているように、また st は s と異なっているのと同じく、ř とは異なっている。」[Recueil, 498]

8

第2論文. 「リトニア語のアクセント法」1896

Accentuation lituanienne, IF. [Recueil, 526-538]

[内容]

ソシュールの法則の証明と、この法則を用いて得られた最重要の意味をもつ次の現象を発見した:

現代リトニア語の4種類のアクセントパラダイム(AP)は、ソシュールの法則が働く前には、2種類のアクセントパラダイム(固定APと移動AP)に縮減し、これは他の印欧語(Skt., Gk., Germ.)のアクセントタイプ(パリントンタイプとオクシントンタイプ)に対応している。

また、所謂「ペダーセンの法則 Pedersen's law」を初めて仮定した。

・この論文は「ソシュールの法則」の証明が主眼ではないことに注意。

9

ソシュールの法則

「諸方言への分裂以前のある時代に、アクセントは、《それがシルコンプレックス (geschliffen) 音調を有する音節の上に本来あるとき、その直後にアキュート (gestossen) 音調があれば、規則的に1音節だけ前進した【=後続の音節に移動した】》。」[Recueil, 526]

*laĩkyti (aĩ + ý) > laikyti 《保つ》
 cf. *raĩzyti (ái + ý) > ráizyti 《切る》

I. 曲用におけるソシュールの法則(Sの法則)

	固定(1)	固定/α (2)	移動(3)	移動/α (4)
Nom.	várna 鳥	rankà 腕	galvà 頭	mergà 娘
Gen.	várnos	raĩkos	galvõs	mergõs
Dat.	várnai	raĩkai	gálvai	meĩgai
Acc.	várną	raĩką	gálvą	meĩgą
Instr.	várna	rankà	gálva	mergà
Loc.	várnoje	raĩkoje	galvojè	mergojè

(下線部はソシュールの法則が働いた形)

10

レスキーンの法則(Lの法則)

Leskien (1881):

「本来の長い語末音節由来のシルコンプレックスアクセントをもつものは古い長さを保った。しかしアキュートアクセントをもつものは短縮した。」→ 音調とアクセントとの独立

nom. gerà < *gerá 《良い》 cf. geró-ji < *gerá-ji
 gen. gerõs

レスキーンの法則が働く以前の形

nom. rankà (Lの法則) < *raĩk'á (Sの法則) < *r'laĩkà
 instr. rankà (Lの法則) < *raĩk'á (Sの法則) < *raĩkán < *r'laĩkán

11

現代リトニア語
 固定AP → 固定AP [AP 1]
 → (Sの法則) → 固定APα [AP 2]

移動AP → 移動AP [AP 3]
 → (Sの法則) → 移動APα [AP 4]

「従って、現代のリトニア語において2つのアクセントの移動性が混合されている: 1つは新しい移動性【Sの法則が働いたもの】で、他は古い移動性である【印欧語から受け継いだ移動性】。Sはこれを《文法的》という。

1つは音調に依存的な移動性で、他は音調に依存しない移動性である。」[Recueil, 527]

12

2. 活用におけるソシュールの法則

動詞の活用はただ固定APだけをもつ:

áugti 《成長する》: sg. 1. áugu

viľkti 《引きずる》: sg. 1. velkù (< *velk'ũo < *v'elkũo < *-k'ũ)

Sの法則

しかし、Sは、-ant分詞形と接頭辞アクセント法によって、リトアニア語には固定APと移動APが存在していたと仮定する。

13

移動

固定

		α		α
現在 1. sg.	áugu	<u>nešũ</u>	tráukiu	<u>šaukiũ</u>
3. sg.	áuga	neša	tráukia	šaukia
接頭辞 1. sg.	<u>ne áugu</u>	nè nešu	ne tráukiu	<u>ne šaukiũ</u>
3. sg.	<u>ne áuga</u>	nè neša	ne tráukia	ne šaukia
分詞				
nom. sg.	augãs	nešãs	tráukias	šaukias
acc. sg.	áugantĩ	nešantĩ	tráukinatĩ	šaukiantĩ

(下線部はSの法則が働いた形)

・移動APのアクセント移動位置に注意: 語頭～末尾の移動

14

Sの結論

「分詞のパラダイムは、a)音調に依存していない、しかしb)動詞形成の方法に依存している(中略)。もしこの事実の原因が定動詞そのもののパラダイムの昔の違いによって与えられなかったら、この事実をいかに説明すべきなのであろうか。」[Recueil, 529-530]

15

3. 派生におけるソシュールの法則

名詞からの派生接尾辞の第3のカテゴリの場合:

「この【第3の】接尾辞をもつ派生語は、基語のパラダイムがどのようなものかによって、一 移動パラダイムあるいは固定パラダイムであるかによって一接尾辞の上か、あるいは基語の語幹の上にアクセントを受け取る。」[Recueil, 530]

移動AP

dãrbas (3) → darbiniãkas (2)

kãlnas (3) → kalnũotas (1)

固定AP

bũrtas (1) → bũrtininkas (1)

malũnas (2) → malũnininkas (1)

krũmas (1) → krũmuotas (1)

lãpas (2) → lapũotas (1)

(下線はSの法則: lapũotas < *lãpũotas < *-p'ũotas)

16

Sの結論

ソシュールの法則が働く以前には、リトアニア語には2つのAP(固定APと移動AP)が存在していた。

この2つのAP(固定APと移動AP)と印欧語のAPとの関係:

Lith.	PIE
固定AP ~	バリトンAP (colonne radicale上のaccent)
移動AP ~	オクシントンAP (colonne radicaleに後続するaccent)

[Sは例を挙げていないが、対応する一例:

Lith. vilna (1) ~ OInd. ũrmã;

Lith. diẽvas (4) ~ OInd. devãs]

17

Sのさらなる仮説:

Lith.の移動APが印欧語のオクシントンAPからどうやって発達したのかという仮説

	(v)		(G)
nom., voc.	*duktẽ	>	duk tẽ 《娘》
acc.	*duktẽ rin	>	dũk terĩ
dat., loc.	*duktẽ rĩ	>	dũk terĩ
gen.	*dukte rẽs	>	duk terẽs
instr.	*dukte rimĩ	>	duk terimĩ, etc.

「1)ただgとvだけが移動パラダイムとして原初に存在していた(それ故、今、固定パラダイムをもつ語だけが古代にバリトン化されていた)。2)パラダイムgとvにおいて、偶然に内部の音節にあったあらゆるアクセントは語頭音節に移動した。それに対して、あらゆる末尾アクセントは元の位置に残った。」[Recueil, 533]

18

この法則の結果

リトアニア語では「初期には不可能であった、アクセントの距離を隔てた移動が可能になった(《アクセントの跳躍 saut de l'accent》の始まり)。それはその後、リトアニア語アクセント法のシステム全ての特徴となった。」[Recueil, 534]

例: nom. auksakalys ~ acc. áuksakalį.
Cf. Russ. nom. golová ~ acc. gólovu

この法則を一般に「ペダーセンの法則 Pedersen's law」というが、その嚆矢はソシュールにある。Cf. Pedersen (1933)

19

3. その後のバルト・スラヴ語アクセント学における、Sの Lith. Acc. 研究の評価

1. ソシュールの法則

ソシュールの法則はその後、スラヴ語にも適応された。「フォルトナートフ・ソシュールの法則」とも言われる。フォルトナートフはスラヴ語にもソシュールの法則が働くと思なした。しかし、Chr. Stang (1957)によって、スラヴ語にはソシュールの法則は働かないことが明らかとなる。

⇒ スラヴ語にSの法則が働くと思なす研究者は今ほとんどいない(このようなStang以前の考えを「classical accentology」という)。

⇒ Sはスラヴ語にSの法則が働くことは一度も言ったことはない。

20

2. 「音調とアクセントの独立」

Kurylowicz (1958) は、無アクセント音節における音調対立を否定し(現代リトアニア語参照)、ソシュールとレスキーンLeskienの法則を拒否(K. は、語末母音の短縮によって生じたとする: *rañkō > rankà)。

⇒ 多くの研究者はKurylowiczに賛同しない。

Garde (1976: 194)参照:「ソシュールの法則とレスキーンLeskienの法則の2つの法則を混同しようとするあらゆる仮説は、遙かに複雑な説明に至るしかない。」

・低地リトアニア方言では無アクセント音節にも音調がある。

⇒ Sの考えが今でも有効。

21

3. Lith. Acc.と印欧語のアクセントとの関係

Kurylowicz (1958) は、バルト・スラヴ語の固定APと移動APの対立と、印欧語のbarytonaとoxytonaの対立の関係を否定。

⇒ しかし Illič-Svityč (1963), Dyboによって両者の起源的な関係が証明された。

⇒ Sの考えが支持されている。

22

4. Lith.の移動アクセントの起源

Sによる、リトアニア語の移動性の起源の仮説:

子音語幹名詞の語中音節から語頭へのアクセント移動(*duktē|rin > dūk|terj)の仮説は、その後Pedersen (1933)らによって修正された:「同じパラダイムにおいて他の(末尾)アクセントとともに対照をなすアクセントの後退、またこの対照のために強調され、先んじられたアクセントの後退が重要である」(Pedersen, ibid. 25)。

これは「Pedersen's law」と言われるが、Pedersenが特に新しい発見をしたとは思われない。

Cf. Olander (2009: 18)、矢野(1984: 9)

⇒ Sの仮説は今でも有効。

23

参考文献

- Būga, K. (1961) *Rinkiniai raštai*. III. Vilnius.
Dybo, V. A. (1977) Работы Ф. де Соссюра по балтийской акцентологии. Фердинанд де Соссюр. Труды по языкознанию. Москва.
Fortunatov, Ph. (1880) Zur vergleichenden Betonungslehre der litauischen Sprachen. *AsiPh*. IV.
Иллич-Свитыч, В. М. (1963) Именная акцентуация в балтийском и славянском. Москва.
Joseph, J. E. (2009) Why Lithuania Accentuation Mattered to Saussure. *Language and History*, vol. 52, No. 2, November. pp. 182-198.
Kurschat, F. (1876) *Grammatik der litauischen Sprache*. Halle.
Kurylowicz, J. (1958) *L'accentuation des langues indo-européennes*, 2-e éd., Wrocław — Kraków.
Laigonaite, A. (1978) *Lietuvių kalbos akcentologija*. Vilnius: Mokslo.
Leskien, A. (1881) Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen — *AsiPh*, Bd. V. pp. 188-190.
Leskien, A. (1919) *Litauisches Lesebuch mit Grammatik und Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
Olander, T. *Balto-Slavic Accentual Mobility*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
Pedersen, H. (1933) *Études lituanienne*. København: Levin & Munksgaard.
Petit, D. (2010) New insights on Lithuanian accentuation from the unpublished manuscripts of Ferdinand de Saussure (1857-1913). *Baltic Linguistics*. pp. 143-166.
Saussure, F. de (1894) À propos de l'accentuation lituanienne. *Mémoires de la Société de linguistique*, VIII, 1894, pp. 425-446.
Saussure, F. de (1896) Accentuation lituanienne. *Indogermanische Forschungen*, VI, Anzeiger, Strassburg, pp. 157-166.
Saussure, F. de (1922) *Recueil des publications scientifiques Ferdinand de Saussure*, Genève. [1984, Genève-Paris: Slatkine]
Senn, A. (1966) *Handbuch der litauischen Sprache. I. Grammatik*. Heidelberg: C. Winter.
Stang, Chr. (1957) *Slavonic accentuation*. Oslo, 1957.
矢野通生「バルト・スラヴ語アクセント史研究序説(1)」名古屋大学文学部研究論集、88, 1984.

24

日本歴史言語学会
2017 春季シンポジウム「ソーシャルと歴史言語学」@研究社英語センター

質 問 ・ コ メ ン ト 票

ふりがな お名前	
メールアドレス	
ご所属	
ご専門, ご関心	
日本歴史言語学会の 会員ですか?	是 否
誰に質問しますか?	町田 神山 柳沢 全員
ご質問・コメント等 ご自由にお記してください	

適宜ご質問・コメントを記入いただき、基調講演後に綴りから切り離して回収者にお渡しください。
時間等の都合により回答できない場合もあります。予めご了承くださいますよう。